

2015年度第5回 長崎大学経済学部ファカルティセミナー

2015年度第5回長崎大学経済学部ファカルティセミナーを以下の要領で行います。教職員、大学院生、学生の参加をお待ちしています。

日時：2015年11月18日（水）14:30～16:00

場所：東南アジア研究所1階 ファカルティセミナー室

報告者：庵谷 治男（長崎大学経済学部）

報告タイトル：管理会計の移転に関する研究

要旨：本研究の目的は管理会計システム（Management Accounting System: MAS）の導入プロセス（とくに移転プロセス）に焦点を当て、導入組織がいかにしてMASをルーティン化するのかについて、知識移転理論に基づく解釈の可能性を検討することである。

これまでもMASの導入に関する研究は学術的領域で多く実施されてきた。谷（2004）ではそれらの先行研究を網羅的にレビューしてMAS導入のあり方について理論的・実証的に検討している（谷武幸, 2004『成功する管理会計システム—その導入と進化』中央経済社。）。たとえば、MASの具体的手法として活動基準原価計算（Activity-based Costing: ABC）やバランスト・スコアカード（Balanced Score Card: BSC）がある。先行研究の多くは、導入組織においてそれらの手法がいかにして設計（design）・利用（use）されているかを解明している。しかし、それは管理会計というシステムの設計と利用に焦点を当てたに過ぎない。

一方、MASの導入プロセスでは旧システムから新システムへの変更を伴った場合、ルーティンの変化がみられるはずである。ここでルーティンとは管理会計実践を指し行為の再現を含む（Burns, J. and R. W. Scapens, 2000, “Conceptualizing Management Accounting Change: An Institutional Framework,” *Management Accounting Research*, 11, pp.3-25.）。ルーティン概念を用いたMASの研究は既に存在する。たとえば、浅田ほか（2013）は知識創造理論を援用しながら、MASを形式知としてのルールによって、MASの実践を暗黙知としてのルーティンによって捉えMASの変化プロセスを描出している（浅田拓史・吉川晃史・上總康行, 2013「日本電産株式会社の経営改革と管理会計—知識創造理論の視点から—」『管理会計学会』21（2）, pp.41-60.）。

浅田らの研究はある単独組織内における知識創造に焦点を当てた研究であるが、本研究ではある組織から別の組織へMASという知識が移転（導入）されることに焦点を当てる。MASの移転はMASの導入のひとつの形態にすぎないが、本研究ではMASの移転に着目し知識移転理論を援用した場合に期待される新たな解釈や知見について検討を試みる。

ファカルティセミナーでの報告を希望される方は、研究企画委員会ファカルティセミナー担当者（藤田）までご連絡下さい（Mail:fujitatf@nagasaki-u.ac.jp, 内線:361）。また外部者による報告も受け付けています。